

自然の法則について(その2)「内在説」と「賦課説」

5280 テクスト (A.N.Whitehead, *Adventures of Ideas*, 種山恭子訳『観念の冒険』)  
を読むために

以下は, *Dialectica et Neoaristotelismus - Whitehead* の検討(3) -  
(『比較論理学研究』第7号(2010), pp.1-3より)

5285 「自然の法則」と神の問題

さて、「神」の問題を、『過程と実在』の記述に基づいて理解することに  
役立つ視点として、Whiteheadが、哲学史上の実例に言及している記述を挙  
げることができるであろう。それは、直接に、「神」に言及するのではなくて、  
5290 宇宙や自然についての全体的な議論の中で、「自然の法則」と言わ  
れるものと、「神」との関係について言及している箇所である。いわゆる、  
Whiteheadの「形而上学三部作」の中では、最後に出版された『観念の冒険』  
(*Adventures of Ideas*, 1933)の中で、Whiteheadは、哲学史上、「自然の法則」  
が、いかなるものとして、把握されてきたのかという問題を取り上げている  
5295 (第二部、第7章)。この問題は、宇宙観の問題であり、換言すれば、  
「自然の秩序」と「自然」そのものを、いかなるものとして把握するか、  
という問題であり、「古代および近代の宇宙論」と、その宇宙論を生み出  
すために用いられた様々な思索の方法や学的方法の問題である。ここで、  
5300 Whiteheadは、それぞれの宇宙論を唱えた人々の、宇宙や自然についての「抱  
握」prehensionを、哲学史上の実例を挙げて説明しているのである。さて、  
実際に、Whiteheadが取り上げている「自然の法則」に関する説は、次の4  
つである。彼は、次のように述べている。(プリントp. 128のものを再録)

5305 At the present time, there are prevalent four main doctrines concerning the  
Laws of Nature: the doctrine of Law as immanent, the doctrine of Law as  
imposed, and the doctrine of Law as observed order of succession, in other  
words, Law as mere description, and lastly the later doctrine of Law as  
conventional interpretation. [A. N.Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 111]  
現在、一般に行きわたっている「自然の法則」に関しての四つのおも  
5310 な説があります。すなわち、「法則」を内在するものとする説、「法  
則」を課せられたものとする説、「法則」を観察された継起の秩序だ  
とする説、換言すれば、「法則」を単なる記述だとする説、と、最後  
に、「法則」を規約による解釈だとする比較的最近の説がそれです。  
[種山恭子訳『観念の冒険』, p. 499]

5315 これらの「自然の法則」に関する説の中で、「神」あるいは「絶対的存在  
者」との関係が比較的是っきりしているのは、第一の「内在説」と第二の  
「賦課説(課せられたものとする説)」である。すなわち、「内在説」に  
よれば、

自然の法則について（その2）「内在説」と「賦課説」

5280 テキスト（A.N.Whitehead, *Adventures of Ideas*, 種山恭子訳『観念の冒険』）  
を読むために

以下は、Dialectica et Neoaristotelismus - Whitehead の検討(3) -  
(『比較論理学研究』第7号(2010), pp.1-3より)

5285 「自然の法則」と神の問題

さて、「神」の問題を、『過程と実在』の記述に基づいて理解することに  
役立つ視点として、Whiteheadが、哲学史上の実例に言及している記述を挙  
げることができるであろう。それは、直接に、「神」に言及するのではなくて、  
5290 宇宙や自然についての全体的な議論の中で、「自然の法則」と言わ  
れるものと、「神」との関係について言及している箇所である。いわゆる、  
Whiteheadの「形而上学三部作」の中では、最後に出版された『観念の冒険』  
(*Adventures of Ideas*, 1933)の中で、Whiteheadは、哲学史上、「自然の法則」  
が、いかなるものとして、把握されてきたのかという問題を取り上げている  
5295 (第二部、第7章)。この問題は、宇宙観の問題であり、換言すれば、  
「自然の秩序」と「自然」そのものを、いかなるものとして把握するか、  
という問題であり、「古代および近代の宇宙論」と、その宇宙論を生み出  
すために用いられた様々な思索の方法や学的方法の問題である。ここで、  
5300 Whiteheadは、それぞれの宇宙論を唱えた人々の、宇宙や自然についての「抱  
握」prehensionを、哲学史上の実例を挙げて説明しているのである。さて、  
実際に、Whiteheadが取り上げている「自然の法則」に関する説は、次の4  
つである。彼は、次のように述べている。(プリントp. 128のものを再録)

5305 At the present time, there are prevalent four main doctrines concerning the  
Laws of Nature: the doctrine of Law as immanent, the doctrine of Law as  
imposed, and the doctrine of Law as observed order of succession, in other  
words, Law as mere description, and lastly the later doctrine of Law as  
conventional interpretation. [A. N. Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 111]  
5310 現在、一般に行きわたっている「自然の法則」に関しての四つのおも  
な説があります。すなわち、「法則」を内在するものとする説、「法  
則」を課せられたものとする説、「法則」を観察された継起の秩序だ  
とする説、換言すれば、「法則」を単なる記述だとする説、と、最後  
に、「法則」を規約による解釈だとする比較的最近の説がそれです。  
[種山恭子訳『観念の冒険』, p. 499]

5315 これらの「自然の法則」に関する説の中で、「神」あるいは「絶対的存在  
者」との関係が比較的是っきりしているのは、第一の「内在説」と第二の  
「賦課説（課せられたものとする説）」である。すなわち、「内在説」に  
よれば、

5320

the order of nature expresses the characters of the real things which jointly compose the existence to be found in nature. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, pp. 111-112]

5325

自然の秩序というものは、自然のうちに見いだされるもろもろの存在者を共同して構成しているところの現実の事物の性格を表現している。  
[種山恭子訳『観念の冒険』, p. 499]

5330

ということであるから、我々は、「自然」の中の事物の相互関係を知り、その相互関係における、パターンの同一性を「自然の法則」として理解することになる。換言すれば、その「法則」は、「自然」を構成している事物に行きわたっている性格の共通性を説明するものである、ということになる。そして、この説においては、その相互関係におけるパターンの同一性が「自然の法則」であるところの事物は、同じ資格をもつものとみなされているので、何か他のものとは異なる特権的な存在者は想定されておらず、従って、この説は、「絶対的存在の否定」を含んでいることは明らかである、と言われる。つまり、この「内在説」では、仮に、「神」の名で呼ばれる何らかの存在者が語られるとしても、それは、世界・宇宙内の構成要素のひとつとしての「神」であって、この世界・宇宙とは別の「絶対的存在」「超越的存在」ではないということである。そのような例としては、『創世記』の世界創造における「神」ではなくて、Whiteheadもしばしば言及しているように、プラトンの『ティマイオス』における、世界の制作者としてのデーミウルゴスを挙げるができるであろう。

5335

5340

5345

また、四つのおもな説と言われるもののうち、第三の「記述説」と、最後の「規約説」も、これらの中で、もし、仮に、「神」の名で呼ばれる何らかの存在者が語られるとしても、それは、この世界・宇宙とは別の「絶対的存在」ではない、という点で同じであると言うことができるであろう。従って、「神」との関係で、より注目すべきは、実は、第二の、「法則」を課せられたものとする説、すなわち、「賦課説」ということになる。

5350

#### 「賦課説」の問題

では、「賦課説」とはどのようなものなのか。「法則」を課せられたものとする説は、次のように、説明されている。

5355

5360

The doctrine of Imposed Law adopts the alternative metaphysical doctrine of External Relations between the existences which are the ultimate constituents of nature. The character of each of these ultimate things is thus conceived as its own private qualification. Such an existent is understandable in complete disconnection from any other such existent: the ultimate truth is that it requires nothing but itself in order to exist. But in fact there is imposed on each such existent the necessity of entering into relationships with the other ultimate constituents of nature. These imposed behaviour patterns are the Laws of Nature. But you cannot discover the natures of the relata by any study of the

Laws of their relations. Nor, conversely, can you discover the laws by inspection of the natures. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 113]

5365 「課せられた法則」の説は、さきの場合とは二者択一の関係にあるいま一つの形而上学説、すなわち、自然の究極的構成要素たる存在者間の「外的関係」を唱える形而上学説を採用しています。したがって、  
5370 これら究極的な事物それぞれの性格は、その事物自身の固有の限定として考えられるのです。こうした存在者は、同様の他のどんな存在ともまったく切り離して（そのものだけで）理解されうるものであって、  
5375 根本的な真実においては、そうした存在者は、存在するのにそのもの自身以外何者をも要しないのです。しかし事実上、こうした存在者のおのおのには、自然の他の究極的構成要素と関係を結ばなければならないという必然性が課せられています。これらの課せられた動きのパターンが「自然の法則」なのです。しかし、関係の「法則」をどのように研究しても、そのことによって関係項の本性を発見することはできません。また逆に、関係項の本性を調べることによって法則を発見することもできないわけです。[種山恭子訳『観念の冒険』, p. 501]

5380 存在するのにそのもの自身以外何者をも要しないと存在者の間の関係、あるいは、それらの存在者どうしの「動き（ふるまい, behaviour）」のパターンが、「自然の法則」であるというとき、「自然の法則」は、はじめからあるものなのか、それとも、何かによって、外から、課せられたものなのか、という問題に対する答のひとつが、この「賦課説」であると言えるだろう。そうすると、「賦課説」は、容易に、ある種の「理神論（デイズム）」を示唆することになるであろうし、また、逆に、ある種の「理神論（デイズム）」という信念が先にあって、そこからの帰結として、「賦課説」が出てきたとも言えることになる。

5390 The explanation of the doctrine of Imposition both suggests a certain type of Deism, and conversely it is the outcome of such a Deistic belief if already entertained. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 113]

5395 こうした「賦課」説の説明は、ある種の型の「理神論」を示唆しますが、逆にそれはまた、もしも「理神論」的な信念がすでに抱懐されていたとすれば、その信念の結果でもあります。[種山恭子訳『観念の冒険』, p. 501]

5400 この「理神論」の例として、Whiteheadは、ニュートンやデカルトに言及しているのであるが、ニュートンの場合、『プリンキピア』に示されているような、美しいシステムとしての太陽系の考えは、「自然の法則」を課する「神」を必要とすることを明らかにいうるには、十分に究極的なものだと考えたとしている。

But he certainly thought that the conception of the solar system exhibited in

5405 his Principia was sufficiently ultimate to make obvious the necessity of a God  
imposing Law. Newton was certainly right to this extent, that the whole  
doctrine of Imposition is without interest apart from the correlative doctrine  
of a transcendant imposing Deity. [Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 113]  
5410 しかし、彼（ニュートン）は確かに、その『プリンキピア』に示され  
ているような太陽系の考えが、「法則」を課する一個の神の必要を明  
らかにしうるには十分に究極的なものだと考えたのです。ニュートン  
は確かに、「賦課」説全体が、それと相関するところの、法則を課す  
る超越的な神の説を離れては重要ではないという、この範囲まででは  
正しかったのでした。[種山恭子訳『観念の冒険』, p. 502]

5415 Whiteheadが指摘するニュートンの『プリンキピア』については、具体的な  
箇所が示されておらず、種山訳は、その「一般的註」を指示しているけれ  
ども、このことは、『光学』第III篇の最後の「疑問」にも見ることができ  
5420 るであろう。それを、順を追って、やや具体的に見てゆくと、まず、  
「神」による世界の創造についての言及があり、最初に「神」が物質をい  
かなるものとして創造したのか、すなわち、「固い、充実した、密な、堅  
い、不可入性の、可動の粒子」として創造したことが語られる。

5425 All these things being consider'd, it seems probable to me, that God in the  
beginning form'd Matter in solid, massy, hard, impenetrable, moveable  
Particles, of such Sizes and Figures, and with such other Properties, and in  
such Proportion to Space, as most conduced to the End for which he form'd  
them; and that these primitive Particles being Solids, are incomparably harder  
5430 than any porous Bodies compounded of them; even so very hard, as never to  
wear or break in pieces; no ordinary Power being able to divide what God  
himself made one in the first Creation. While the Particles continue entire,  
they may compose Bodies of one and the same Nature and Texture in all  
Ages: But should they wear away, or break in pieces, the Nature of Things  
depending on them, would be changed. [I. Newton, *Opticks*, 1952(1730, 4th  
5435 ed.), New York: Dover, p. 400(Book Three. Part I. Quest. 31)]  
以上のことすべてを考察すると、私には次のことが確からしく思われ  
る。すなわち、初めに神は物質を、固い、充実した、密な、堅い、不  
可入性の、可動の粒子に形作り、その大きさと形、その他の性質およ  
び空間に対する比率を、神がそれらを形作った目的に最もよくかなう  
5440 ようにした。これら始原粒子は固体であるから、それらの複合物であ  
るいかなる多孔質の物質よりも比較できないほど堅く、決して摩滅し  
たり、粉々に壊れたりしないほどきわめて堅い。神自らが最初の創造  
において、一つに作られたものを、普通ので力で分割することは不可  
能である。これらの粒子が壊れず完全であるかぎり、それらは万世を  
5445 通じて同じ性質と構造をもつ物質を構成することができる。しかし、  
もしそれらが摩滅したり、粉々になったりすると、それらに依存して  
いる事物の性質は変わるであろう。[ニュートン／島尾永康訳『光

5450 ここで、ニュートンが、「神」が最初の創造において、物質を「堅い固  
体粒子」として創造した、と述べるのは、その創造によって、現に観察さ  
れるような太陽系のシステムが可能になっていることを指摘するだけ  
でなく、むしろ、それが「創造主」である「神」の意図であることを認め  
5455 ているからであると言うことができるであろう。別の言い方をすれば、い  
わゆる「自然の斉一性(Uniformity)」を確保するために、「神」は、物質を  
「堅い固体粒子」として創造したのであるが、「自然の斉一性」を確保す  
ることが「創造主」の意図するところであった、ということである。この  
ことは、次の箇所、一層明らかである。

5460 Now by the help of these Principles, all material Things seem to have been  
composed of the hard and solid Particles above-mention'd, variously associated  
in the first Creation by the Counsel of an intelligent Agent. For it became him  
who created them to set them in order. And if he did so, it's unphilosophical  
5465 to seek for any other Origin of the World, or to pretend that it might arise out  
of a Chaos by the mere Laws of Nature; though being once form'd, it may  
continue by those Laws for many Ages. For while Comets move in very  
excentrick Orbs in all manner of Positions, blind Fate could never make all  
the Planets move one and the the same way in Orbs concentrick, some  
5470 inconsiderable Irregularities excepted, which may have risen from the mutual  
Actions of Comets and Planets upon one another, and which will be apt to  
increase, till this System wants a Reformation. Such a wonderful Uniformity  
in the Planetary System must be allowed the Effect of Choice. And so must  
the Uniformity in the Bodies of Animals.[I. Newton, *Opticks*, 1952(1730, 4th  
ed.), New York: Dover, p. 402(Book Three. Part I. Quest. 31)]

5475 さてこれらの原理の助けによって、すべての有形の事物は、上述の堅  
い固体粒子からなり、最初の創造において、聡明な能動者の意図によっ  
て、さまざまに結合されたように思われる。有形の事物に秩序を与え  
ることは、それらを創造した者にふさわしいからである。そして、も  
しそれが神の御業であるならば、世界の起原を他に求めること、つま  
5480 り、世界はたんなる自然法則によって渾沌から生じたであろうなどと  
主張することは、非哲学的である。もっとも、ひとたび形成されると、  
世界は自然法則によって多くの年代にわたって持続することができる  
のであるが。なぜなら、彗星があらゆる位置をきわめて偏心的な軌道  
で動くのに対して、すべての惑星を、あるわずかな不規則性をのぞい  
5485 て、同心的な軌道上を同じ方向に運行させることは、盲目的な運命の  
よくするところではないからである。その不規則性は彗星と惑星の相  
互作用から生じたのであろうが、増加する傾向にあるので、ついには  
この体系は改革を必要とするようになろう。惑星体系のこのような驚  
くべき斉一性は、選択の結果であると認めなければならない。動物の  
5490 体躯の斉一性も同じである。[ニュートン/島尾永康訳『光学』，岩

(以下, プリント p.128へ続く)

5495 文献

Newton, I., *Opticks*, 1952(1730, 4th ed.), New York: Dover.

ニュートン/島尾永康訳『光学』, 岩波文庫, 1983年.

Whitehead, A. N., 1967(1933). *Adventures of Ideas*, New York: Macmillan .

5500 ホワトヘッド/種山恭子訳『観念の冒険』(『ラッセル, ウィトゲンシュタイン, ホワイトヘッド』世界の名著70, 中央公論社, 1980年)所収.

Whitehead, A. N., 1978. *Process and Reality*, Corrected Edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne, New York.

A. N. ホワトヘッド/平林康之訳, 『実在と過程, コスモロジーへの試論』  
1, 2, みすず書房, 1983年.

5505

5510

5515

5520

5525

5530